

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00821

研究課題名（和文）日英バイリンガルのアイデンティティ研究

研究課題名（英文）J-E Bilingual identity of individuals in Japan

研究代表者

田浦 アマンダ（TAURA, Amanda）

摂南大学・国際学部・准教授

研究者番号：60388642

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：英語圏からの帰国高校生13人から収集したインタビューデータを、量的語彙分析後、解釈的現象学的分析手法を用いて分析した。その結果、幼少期を英語圏で過ごした後で帰国した生徒達は、日本社会や日本での学校生活に適用する過程でいじめや無視を多少なりとも体験するが、外国語保持教室に通って同様の体験をした仲間と交わることで、英語圏文化でも日本文化でもない独自の文化に所属している、つまりthird culture kidとしてのアイデンティティに繋がっている事が判明した。これだけグローバル化が進む世の中でも、まだまだ40年前の帰国生が直面した日本帰国時の状況から大きく変わっていない事が詳らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英語圏からの帰国高校生13人から収集したインタビューデータを、量的語彙分析後、解釈的現象学的分析手法を用いて分析した。その結果、幼少期を英語圏で過ごした後で帰国した生徒達は、日本社会や日本での学校生活に適用する過程でいじめや無視を多少なりとも体験するが、外国語保持教室に通って同様の体験をした仲間と交わることで、英語圏文化でも日本文化でもない独自の文化に所属している、つまりthird culture kidとしてのアイデンティティに繋がっている事が判明した。これだけグローバル化が進む世の中でも、まだまだ40年前の帰国生が直面した日本帰国時の状況から大きく変わっていない事が詳らかになった。

研究成果の概要（英文）：Interview data collected from 13 high school students returning from English-speaking countries were analyzed using an interpretive phenomenological analysis method after quantitative lexical analysis. The results revealed that the students who returned to Japan after spending their childhood in English-speaking countries experienced some bullying and neglect in the process of re-settling down into the Japanese society and school life in Japan, but by attending foreign language retention classes and mixing with peers who had similar experiences, they were able to identify themselves as belonging to a unique culture that was neither English-speaking nor Japanese culture. In other words, it turned out that they identify themselves as third culture kids. The results revealed that even in a world where globalization is advancing at such a rapid pace, the situation has not changed much from what returnees faced 40 years ago when they returned to their home countries.

研究分野：バイリンガリズム

キーワード：バイリンガリズム アイデンティティ 帰国高校生 ナラティブ

1. 研究開始当初の背景

海外からの帰国児童・生徒研究はバブル時期までは、「アクティブに学習に取り組み、興味ある部分を深く探求し、成果をクラスで発表する教育」(いみじくも2020年度から文科省が小中高校に順次導入する新指導要領の肝はこの部分である)を受けた先輩として活用しようとする機運が高まっていた。しかしその後、日本経済の停滞により海外派遣される日本人駐在員の減少に伴い帰国生数も激減し、帰国生対象の研究が急速に下火となってしまった。本研究申請者チームは、日本国内で非常に数少ないバイリンガリズム研究者で、20年以上に亘って縦断研究を言語側面に関して、またバイリンガル脳研究にも過去10年間従事してきた。この2面を追究するにつれて直面したのは、帰国生が渡航時及び帰国時以降どのような情緒的葛藤に苛まれ、克服してきたのか(或いは未だに克服できていないのか)を直接本人達から聞かずして、最終的な結論は導き得ないとの認識であった。つまり、帰国生の言語保持・喪失を解釈するには、本人達からの情緒面での主観的ナラティブデータの入手がどうしても必要であるとの思いに至った。その為に、帰国生から、渡航当時の心境・現地校に慣れるにつれて変化した心情・帰国直後の心境・日本生活に再度慣れた現在の心境を(ライフストーリー、アイデンティティ研究として)聞き取り調査する。

2. 研究の目的

バイリンガリズム研究自体が日本では数少ないが、それらは言語面(Taura & Taura, 2012; Mori, 2019)やコードスイッチ或いは国際結婚家庭内での言語使用(International Journal of Bilingual Education and Bilingualism 2012年特集号)等を取り扱ったものであり、現在も細々と主として博士論文研究(Kubota, 2019)等として行われている。一方日英バイリンガル帰国生のアイデンティティ研究は南により2000年に、渋谷により2007年に、本研究代表者により2017年(Taura & Healy, 2017)に行われた位である。このような状況で本研究は、過去に(本研究申請者による)言語保持研究や脳賦活研究に研究協力者として参加した日英バイリンガル帰国生や国際結婚家庭児(現在では多くが大学生や社会人となった人たち)を対象にインタビュー調査をパイロット研究として行った後、現役のバイリンガル高校生帰国生からデータ収集を行う。言語データや脳賦活データのような量的データの分析と異なり、アイデンティティに関するインタビューデータに「平均値」は存在しないので、妥当性・信頼性を可能な限り担保しながらも、アイデンティティの観点から分析を行う。

3. 研究の方法

英語圏からの帰国高校生13人(東京・名古屋・大阪在住)から英語インタビューデータを収集できた。それぞれの録音データを書き起こしたデータ対象に、質的データ分析の指標とするために、先ず量的分析を行った。この量的分析には、(1)SPSS text analytics, (2) NVivo, (3)KH Coder ソフトを用いた。第1段階として、書き起こし Word file を SPSS text analytics ソフトで読み込めるようにxlsx化した。そのファイルをSPSS上で読み込み、インタビュー全体の流れと各高校生に特徴的な単語表現を確認した。次に、NVivoソフトウェアを用いて、各高校生の発話内で高い頻度で出現した単語の抽出を量的に行った。重要語が判明した所で、そのような語がどのような文脈で使用されたのかを同定する第3段階の作業に入った。KH Coderソフトウェアを用いて、具体的にどのような文脈でそのような語が用いられているのかをKWICコンコーダンスを用いて抽出した。この作業を通して浮かび上がってきたキーワードを基に、半構造化インタビューを対象者全員に実施し、interpretative phenomenological frameworkを理論的枠組みとしてデータの質的分析を行った。

4. 研究成果

上記手法に沿って各結果を以下に示す。

先ず、NVivoソフトウェアを用いて、各高校生の発話内で高い頻度で出現した単語の抽出を量的に行った。その際、yeah, you know, a little bit等の語句は除外して分析を行った。例えばある生徒の発言をwordcloudで分析した結果(一例)が以下の図1である。この高校生の場合、明らかに高頻出語は、Japan, means, school, different等である事が判明した。重要語が判明した所で、そのような語がどのような文脈で使用されたのかを同定する第3段階の作業に入った。KH Coderソフトウェアの「トピックの推定」機能を用いて、全単語対象に高頻度語の再確認(NVivo結果との整合性確認)を先ず行った。その後、具体的にどのような文脈でそのような語が用いられているのかをKWICコンコーダンスを用いて抽出した。その際、本研究で重要なキーワードとなる、identity, returnee, English等も検索対象とした。上記高校生のデータ分析結果の一部が図2.1-2.3のように出力された(共起ネットワーク及びクラスター分析結果)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 HEALY, Sandra and TAURA, Amanda	4. 巻 34, 2
2. 論文標題 Japanese High School Returnees' Identity: Translanguaging of the Mind, Body and Soul	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 183-193
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Olivia Kennedy, Sandra Healy, Chie Fukada, Noriaki Kuwahara	4. 巻 -
2. 論文標題 Teachers' physiological signals to improve teacher-student relationships	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 EUROCALL 2022	6. 最初と最後の頁 222-227
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Hideyuki Taura	4. 巻 4
2. 論文標題 Studying Abroad and its Effects on L2 Brain Structures	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 JAAL in JACET (Japan Association of Applied Linguistics in Japan Association of College English Teachers) Proceedings	6. 最初と最後の頁 16-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hideyuki Taura	4. 巻 33, 2
2. 論文標題 The Effect of Fetal Language Experiences upon a Neonate's Perception of L1, L2, and Music: A Preliminary fNIRS Study	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 209-217
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 KENNEDY, Olivia and HEALY, Sandra	4. 巻 3
2. 論文標題 Exploring Student Failure to Use Smartphones for Language Learning	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 OnCUE Journal Special Issue	6. 最初と最後の頁 34-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hideyuki Taura, Aya Kutsuki, and Amanda Taura	4. 巻 32 (2)
2. 論文標題 Executive Control in Japanese-English Bilingual Kindergartners in Comparison to Monolingual Japanese Children: A Neuro-Cognitive Study	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 8件)

1. 発表者名 TAURA, Hideyuki and TAURA, Amanda
2. 発表標題 The Effects of COVID-19 on Simultaneous Interpretation in Japan: A Neuro-linguistic Case Study
3. 学会等名 The 4th East Asian Translation Studies Conference at Universite Paris Cite, campus des Grands Moulins, France (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 TAURA, Hideyuki
2. 発表標題 Face-to-face, Online, or Hybrid Language Learning/Engaging in a COVID-19 Endemic World?
3. 学会等名 The 57th RELC International Conference at SEAMEO RELC in Singapore (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Healy, Sandra
2. 発表標題 Beyond Borders-Female Non-WEIRD Students' Experience in Japan
3. 学会等名 Living on the Edge 2022
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Melodie Cook / Davey Young / Sandra Healy / Alexandra Burke / Megumi Yoshieda / Olivia Kennedy
2. 発表標題 Barrier-free learning in Japan: Panel
3. 学会等名 PanSIG
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Healy, Sandra
2. 発表標題 Intercultural Sensitivity in a VUCA World
3. 学会等名 Embracing Change through Resilience & Transformation in the Post-COVID-19 World
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kennedy, Olivia and Sandra Healy
2. 発表標題 Making trust measurable between teacher and student
3. 学会等名 EuroCALL2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hideyuki Taura
2. 発表標題 Individual differences between two Japanese attriters of English in their English proficiency and brain activation: A six-year longitudinal fNIRS study
3. 学会等名 The 4th International Conference on Language Attrition (ICLA4) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hideyuki Taura
2. 発表標題 How Brain Activation Changes as One Becomes an Expert Interpreter: An fNIRS Study
3. 学会等名 The 21st Interpreting and Translation Research Institute (ITRI) International Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hideyuki Taura
2. 発表標題 Impact of fetus language experiences exerted on a newborn baby: An fNIRS case study
3. 学会等名 Virtual fNIRS2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hideyuki Taura
2. 発表標題 Studying Abroad and its Effects on L2 Brain Structures: 3 case studies
3. 学会等名 JAAL in JACET 2021
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Amanda Taura & Hideyuyki Taura
2. 発表標題 The ebb and flow of language proficiency and brain activation: A case study on a Japanese-English bilingual returnee
3. 学会等名 13th International Symposium on Bilingualism (ISB 13) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田浦秀幸
2. 発表標題 応用言語学分野におけるバイリテラシー研究の方向性
3. 学会等名 第1言語としてのバイリンガリズム研究会第23回研究会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田浦秀幸
2. 発表標題 青年期以降のバイリンガリズム
3. 学会等名 立命館大学土曜講座11月「バイリンガリズムと年齢
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 HEALY, Sandra	4. 発行年 2021年
2. 出版社 CSMFL Publishers	5. 総ページ数 374
3. 書名 Development of Innovative Pedagogical Practices for a Modern Learning Experience	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田浦 秀幸 (TAURA Hideyuki) (40313738)	立命館大学・言語教育情報研究科・教授 (34315)	
研究分担者	ヒーリ サンドラ (Healy Sandra) (10460669)	京都工芸繊維大学・基盤科学系・教授 (14303)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関